令和８年度病害虫発生情報第２号

令 和 ８ 年 ９ 月 １ １ 日
千葉県農林総合研究センター長

イネ縞葉枯病とヒメトビウンカの発生状況について

～次作でのまん延防止のために、再生株の早期耕うん、ほ場周辺の除草が有効～

１　イネ縞葉枯病とは

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカ（写真１）が媒介するウイルス病である。ウイルスを体内に持ったヒメトビウンカ(保毒虫)がイネを吸汁する際にウイルスを媒介する。ウイルスを持っていないヒメトビウンカも、本病に感染したイネや再生株を吸汁することで保毒虫になる。

ヒメトビウンカはイネ科雑草などで幼虫で越冬する。翌春に羽化した越冬世代成虫がムギ類に移動して産卵する。この時、ウイルスを持ったヒメトビウンカが産卵した卵にウイルスが移行する （経卵伝搬)。ムギ類で次世代の幼虫が増殖し、成虫になると移植後の水田に移動する。そして、イネを吸汁し、ウイルスを媒介する。

幼穂形成期前に発病すると、新葉に黄緑色～黄白色の斑紋を縞状に生じ（写真２）、巻いて垂れ下がる「ゆうれい症状」（写真３）を引き起こし、枯死することによって茎数が減少する。また、幼穂形成期～開花期に発病すると穂の「出すくみ」（写真４）や奇形を生じ穂数が減少する。症状があらわれた穂は稔実しないため、発病した穂の分だけ収量が減少する。



写真１　ヒメトビウンカ（雄）


写真２　縞状の病斑


写真３　ゆうれい症状


写真４　穂の出すくみ

２　発生の経過

（１）本病は2008年頃から関東で発生が拡大しており、千葉県でも2014年以降発生が見られている。

（２）７月下旬の調査において、県内70地点のうち10地点で本病の発生が確認された。発病株率は平年並であったが（データ略）、発生ほ場率は過去10年と比較して２番目に高く（図１）、例年では発生がほぼ見られない印旛、君津地域でも発生が見られた（図２）。

（３）一方、本病を媒介するヒメトビウンカの捕獲成幼虫数は過去10年と比較して最も多く（図３）、県内全地域でやや多い傾向であり、特に君津、夷隅地域で多かった（図４）。

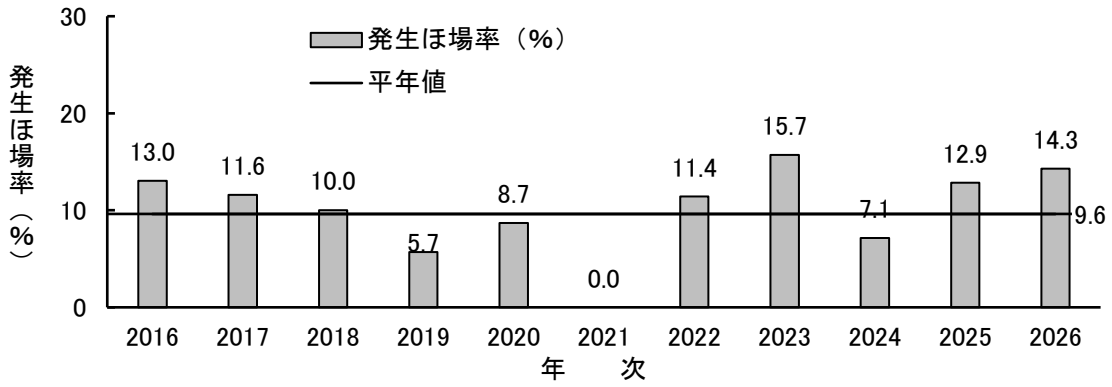


図１　縞葉枯病の年次別発生ほ場率（７月下旬調査）

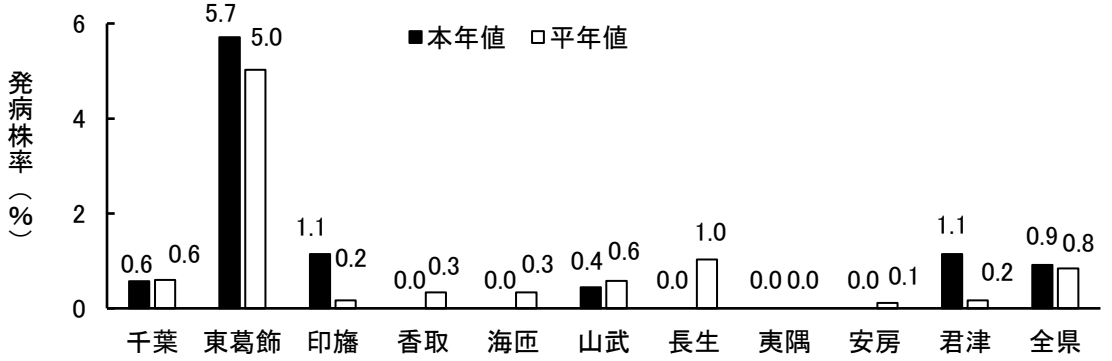


図２　縞葉枯病の地域別発病株率（７月下旬調査）

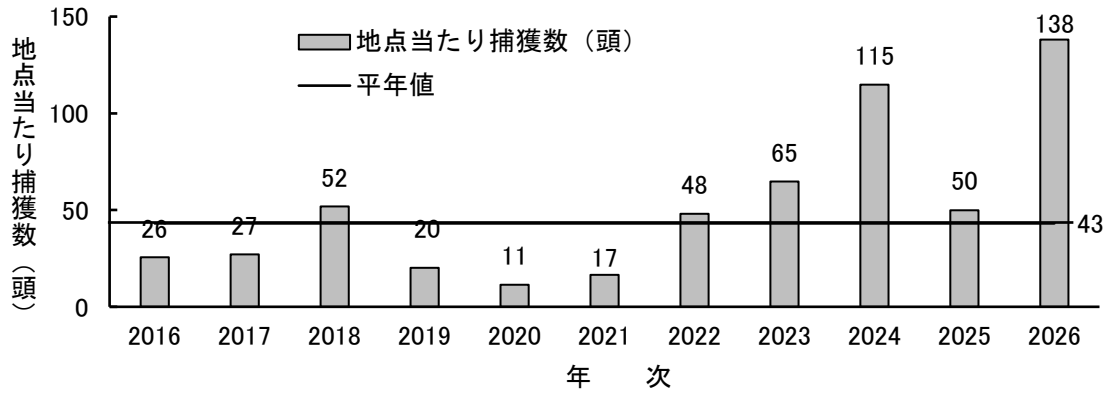


図３　ヒメトビウンカ成幼虫の年次別捕獲数（７月下旬、本田 20 回振りすくい取り調査）

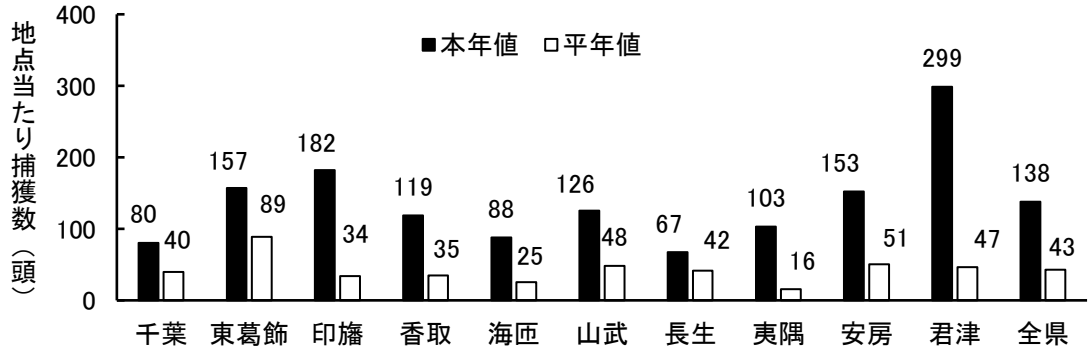


図４　ヒメトビウンカ成幼虫の地域別捕獲数（７月下旬、本田 20 回振りすくい取り調査）

３　防除対策

（１）収穫後の再生株はヒメトビウンカの生息（越冬）場所になり、罹病した再生株は保毒虫率を高める要因となるため、速やかに耕起し稲株を土中に埋没させるなど早期に処分する。

（２）ヒメトビウンカの生息場所を減らすため、ほ場周辺の雑草（特にイネ科雑草）を除去する。

（３）今作で、立毛中に縞葉枯病の発生がみられたか、又は再生株での発病率が５%以上ある場合には、次作では令和８年版農作物病害虫雑草防除指針（水稲-９）を参考に苗箱施用を行う。

（４）ムギ類は越冬後のヒメトビウンカの増殖場所となるので、ムギ類が栽培されている地域は特に、移植後のヒメトビウンカの飛来に注意する。

令和８年版農作物病害虫雑草防除指針へのＱＲコード

・病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。
https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/
・薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。
https://pesticide.maff.go.jp/

問合せ先
千葉県農林総合研究センター病害虫防除課
〒266-0014　千葉市緑区大金沢町 180 番地１
TEL 043(291)6077　FAX 043(226)9107
E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp